

# 会 報

史学研究会は去る十一月二日の會員總會の議決によつて、従来の會則を改め、次のような新會則を決定いたしました。

## 史学研究会々則 (昭和三十一年十一月二日改正)

### 第一章 総 則

(名 稱) 第一条 本会は史学研究会と稱する。

(目 的) 第二条 本会は史学・地理学・考古学を研究し、その發達を図ることを目的とする。

(事 務 所) 第三条 本会は事務所を、京都市左京区吉田本町一番地 京都大学文学部内に置く。

(事 業) 第四条 本会は第二条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 一、史学研究会大会・例会及びその他の会合の開催

- 二、研究・調査及び見学の実施

- 三、会誌「史林」の發行

- 四、その他本会の目的を達成するに必要な事業

### 第二章 會 員

(會員の資格) 第五条 本会は史学・地理学・考古学を研究する者及びこれに関心あるものを會員とする。

(會員の種類) 第六条 本会の會員は次の二種類とする。

- 一、通常會員

- 二、名譽會員

(入 会) 第七条 新たに通常會員にならうとする者は、住所・氏名・職務及び専門を記載し、半年分以上の會費を添えて事務所に申込むものとする。

(名譽會員) 第八条 本会のため功績顯著なものは、評議員會の議決により、名譽會員に推薦することが出来る。

(會員の權利) 第九条 會員は、本会の会合に出席し、研究・調査・見学その他の事業に参加し、会誌「史林」の配布を受け、且つこれに投稿することが出来る。

(會員の義務) 第十条 通常會員は別に定むるところの會費を納入しなければならない。

### 第三章 役 員

(役員の種類) 第十一条 本会に次の役員を置く。

- 一、理事 十三名 但し内一名は理事長、五名は常務理事

- 二、監 事 二名

- 三、評議員 若干名

- 四、委 員 若干名

(選出方法) 第十二条 評議員は會員中より理事会において選出し會員總會の承認を経るものとする。理事及び監事は評議員會においてこれを互選する。理事長及び常務理事は理事会においてこれを互選する。委員は會員中より理事長がこれを委嘱する。理事長は必要に応じて臨時に委員を委嘱することが出来る。

る。

(役員任期) 第十三条 役員任期は各二年とし、重任を妨げない。役員に欠員を生じた場合にはこれを補充することが出来る。補充のために選ばれた役員任期は前任者の残任期間とする。

(役員職務) 第十四条 役員職務は次の通りとする。

- 一、理事長は本会を代表し一切の会務を統轄する。
- 二、理事は理事会を構成し会務を処理する。常務理事は編集・庶務・会計その他の事務を分掌する。

三、監事は本会の会計経理及び会務の執行状況を監査する。

四、評議員は評議員会を組織し、予算案・決算報告書を審議しこの会則に定むる職務を行い、その他理事長の諮問に応じて審議する。

五、委員は常務理事をたすけ、編集・庶務・会計等の実務を分担する。

#### 第四章 会 議

(評議員会) 第十五条 評議員会は毎年一回理事長がこれを召集する。但し理事会において必要と認められた時は監事及び評議員の二分の一以上から召集の請求があつた場合には、臨時にこれを召集する。

(理事会) 第十六条 理事会は必要に応じて理事長がこれを召集する。

(議決の方法) 第十七条 評議員会・理事会は現在数の二分の一以上の出席によつて開会しその議決は出席者の過半数でこれを決する。可否同数の場合は理事長の決するところによる。役員が会議に出席出来ない時は書面で自ら意見を表し、又は他の同じ役員にこれを委任することが出来る。

第五章 会員総会・大会及び例会

(会員総会) 第十八条 毎年一回(秋期)会員総会を開き会務を報告する。

(大会) 第十九条 毎年一回(秋期)大会を開き研究・調査・見学を行う。

(例会) 第二十条 毎年六回例会を開き会員の研究発表を行う。会場はその都度これを定める。その他必要に応じて特別例会を開くことが出来る。

#### 第六章 会 計

(経費) 第二十一条 本会の経費は会費、事業収入及び寄附金を以つて充てる。会費は会誌代を以つてこれに充當する。会誌代は別にこれを定める。

(予算及び決算) 第二十二条 本会の予算案は毎会計年度の開始前に理事会においてこれを編成し、評議員会の議決を経て決定する。決算報告書は毎会計年度の終了後理事会において作成し評議員会の承認を経ることを要する。

(会計年度) 第二十三条 本会の会計年度は毎年四月一日に始ま

り翌年三月三十一日に終る。

## 第七章 会則の変更

(会則の変更) 第二十四条 この会則の変更は理事会において発議し評議員会及び会員総会の承認を経るものとする。

## 附 則

一、この会則の施行について必要な細則は理事会において別にこれを定める。

二、この会則は昭和三十二年四月一日より施行する。昭和三十一年十一月の会員総会で選ばれた評議員は本会則第十二条の規定によつて選出された評議員とみなしその任期は昭和三十二年四月一日より昭和三十四年三月三十一日までの二ケ年とする。昭和三十一年十一月現在その職にある役員は昭和三十二年三月三十一日までその職にあるものとする。

会則変更の主なる理由は次の通りです。

史学研究会は戦後新しく会則を改め、評議員を会員総会で選出し、民主的に会務を処理してまいりました。会員各位の御協力により「史林」の刊行も定期的に行われ、会員数も着実に増加し、全国的に多数の会員を擁する発展を見ておりますことは、御同慶の至りと感謝しております。しかるに従来の会則第三条の規定により、全国学会としての実体具备しているにも拘らず、京都大学文学部史学科を中心とする同窓会的地方学会との誤解を招き易かつたと思ひます。

このような誤解を一掃するために、会の実体に即応した会則に改正いたしました。又、会員総会で投票により選出されておりました評議員が、京阪神在任者に偏つていた為に、新しい会則では理事会が全国的視野で評議員を選出し、会員総会の承認によつて決定することに改めました。同時に、従来の会則にはありませんでしたが、事実上行つておりました予算編成及び決算報告に関する審議の手続きを、明文化しました。

十一月二日の会員総会では理事会が選出した新会則による第一期の評議員六十三名の承認を受け、目下受諾方交渉中です。御本人の受諾を得て確定いたしましたら次号に発表したいと考えております。

今後とも本会発展のために、会員各位の御協力をお願い申し上げます。  
史学研究会理事會

## 執筆 者 紹介

井上 良信	芦屋高校教諭
岡崎 精郎	大阪大学助手
高瀬 重雄	富山大学教授
岡田 芳三郎	平安女子短大助教授
森 鹿三	京都大学人文科学研究所教授
矢守 一彦	京都大学大学院特別研究生

# 学界消息

## 史学研究会關係

史学研究会大会は恒例により十一月一日より開催された。一日(木)の飛鳥地方見学は午前八時二十分京大を出発、橿原神宮大和国史館・石舞台・岡寺・飛鳥寺・酒船石等を見学した。帰途奈良博物館で正倉院展を見学し午後六時帰着。二日(金)総会及び大会は午後一時より楽友会館にて行つた。総会は原理

事長の挨拶に始まり、赤松・有光・藤岡各理事より会務報告があり、新会則と、新会則による次期評議員とを承認した。

当日次の通り講演が行われ、会場に溢れる程の多数の聴衆に夫々深い感銘を与えた。

庄園図の歴史地理的考察 米倉 二郎  
中国の土地所有と均田制

——とくに始源の問題を中心として——  
田村 実造  
山内 清男  
細文式文化論

大会終了後楽友会館でビールパーティーを催し和やかに懇談した。

## 名誉会員新村出博士文化勳章受賞

本会名誉会員新村出博士は十一月三日文化の日に文化勳章を受けられた。博士の榮譽を称えると共に、去る十月四日八十歳の誕生日を迎えられた博士が益々長寿を全うされることを祈つてやまない。

京都大学文学部創設五十周年記念特別例会  
十一月二十四日(土)午後一時、法経第六教室

雑戸の労役について 福尾猛市郎  
六朝時代の社会と宗教 宮川 尚志  
飛騨高地の縄文式石器について 澄田 正一

礪波の散村 村松 繁樹  
小プリニウスのピティニア総督としての使命について 水川 温二

## 国史關係

京都女子大学史学研究会  
十月十三日(土)午後一時 京都女子大学

庶民的世界観の成立  
——石門心学について—— 柴田 実  
カラコルム旅行談 岡崎 敬

読史会秋季大会 十一月三日(祝) 日本硬玉問題

午前九時 京大文学部第一教室  
田堵について 吉田 晶

古代東宮の地位と権力 横田 健一  
伝統の起源 田中 勝蔵

高野山における「行人方」について 本庄 宗正  
親鸞をめぐる諸問題について 赤松 俊秀

中部大和における近世初期村落の形成  
——根成柿を中心とする—— 朝倉 弘  
加賀藩の農地制度に関する二三の問題 若林喜三郎

日本商工会議所の政治史的意義 宮本 又久  
師範学校における歴史教育 酒井 忠雄

室生龍穴神社の神事古礼について 和田 邦平  
寺元株について 平山敏治郎

大会後、知恩院内雪香殿における晩餐会には四六名が参会した。  
史学会大会  
公開講演 十一月十日(土)午後一時  
東大法文経三八番教室

西周の社会 貝塚 茂樹  
日本の硬玉問題 藤田 亮策

日本史部会 十一月十一日(日)

魏志倭人伝に見える女王と男婦

下斗米 清

魏志倭人伝に見える「青大句珠」の一解釈

中川 成夫

大化前官司制の一考察

直木孝次郎

——人制について——

榎原 末一

三代実録の分註について

柳 宏吉

神社創建の注目すべき一事例について

宮地 治邦

奈良・平安時代の国の等級について

山田 英雄

愚管抄の彰考館本・野宮本および天理本

塩見 薫

東北地方在家の成立をめぐる

伊藤 信

「教行信証」成立の動機と時期

笠原 一男

下地分割法の成立に関する二三の問題

——弘安元年及び同七年の立法意義——

島田 次郎

安土宗論の史的意義

中尾 堯

——東海道士山宿の場合—— 森 杉夫

近世在郷町の成立と構造——元禄六年

越中城端町品々帳について——

坂井 誠一

都市門閥特権商人層の衰退過程

——糸割符商人と呉服師について——

中田 易直

授書管見——名古屋水口屋の場合——

織田 長繁

谷口藍田の思想

山口 宗之

明治初年の勸商政策——通商・為替商

会社役割——

中村 尚美

明治中期の仏教と基督教の衝突について

——「教育と宗教の衝突」を辿つて——

吉田 久一

海老名弾正の一側面

高橋 昌郎

明治二年遠州中泉普濟院(救院或は救場と

もうい)規則について

鈴木 泰山

午前九時 一般報告 仏教大学

五山教団の展開

会昌廃仏の一側面

笠間 達男

金光明経の帝王観とそのシナ・日本的受容

——金岡 秀友

碑文から見た大衆部の分布について

静谷 正雄

台密源流

長部 和雄

鎌倉時代における末法思想と新旧仏教

伊藤 真徹

共同課題「国家権力と仏教」

初期チベット史における仏法と王法

壬生 台舜

北周政権の変遷と仏教

大川富士夫

古代国家権力と仏教

二葉 憲香

鎌倉末期における神国思想と仏教

黒田 俊雄

近世・近代における国家と仏教との交渉

柏原 祐泉

日本史研究会大会 十一月十七日(土)

午前十時 立命館大学存心館

日本古代における塩生産の発展について

近藤 義郎

行基伝の諸問題

井上 薫

近世におけるカワタの土地所有について

渡辺 広

長谷川 昇

岐阜加茂事件

高田 仁覚

83 (83)

近代日本における人間像 平林 一  
十一月十八日(日) 午前九時

「時代区分の究明のために」

——歴史における政治と経済——

班田農民をめぐる諸問題 北山 茂夫

領主制の形成と荘園体制 上横手雅敬

明治維新論の再検討 脇田 修

日清戦争後の政治過程 岩井 忠熊

大会後、立命大学生食堂で懇親会が行われた。

大谷大学国史学会大会 十二月二日(日)

慈訓について 佐久間 竜

続日本紀にあらわれた奈良時代

——特に外位制について—— 山香 茂

中世武家家訓に現われた儒仏受容過程 柏原 祐泉

公開講演

熊野信仰と熊野詣 五来 重

東大寺の創建について 山本 栄吾

東洋史関係

東洋史談話会大会 十一月三日(祝)

人文科学研究所

北アジアにおける歴史世界の形成と発展 田村 実造

太平軍と捻軍との関連について

堀田伊八郎

大唐租庸調時代の統計戸数

日野開三郎

清末政治思想に関する一考察

野村 浩一

唐代四川の塩法

古賀 登

——譚嗣同を中心に——

佐伯 有一

中国南朝の対外交渉について

松田 寿男

明末における抗租奴変について

酒井 忠夫

庭州の位置について

長沢 和俊

明末知識人の一類型

前嶋 信次

南詔国の支配層について

藤沢 義美

宣化における立化祖師の事蹟

青木富太郎

明代駅伝の社会経済史的考察

清水 泰次

順義王夫人三娘子について

藤枝 晃

朱舜水の史学思想について

北郷 康

再び長行馬文書について

上原 淳道

太平天国占領下の南潯鎮における

湖糸貿易について

河鱈 源治

鄧の文化

根本 誠

革命評論管見

永井 算己

史記列伝の記載性格について

宇都宮清吉

京大人文科学研究所記念公開講演会

岩村 忍

墨子学園について

浜口 重國

遊牧帝國の成立過程

十二月十日(日)

唐の賤民制度に関する雑考

龍谷大学図書館

京大人文科学研究所交換研究会

十二月五・六日(水・木)

々から多数の積極的な参加をいただき、盛大に挙行された。

イスラエル民族に於ける民族性と世界性

弁論術の起源

ギリシアの音楽

クロイソスのロゴスについて

——ヘロドトス批判の一視点——

Lex Maiestatis ~ Lex-Valeria

Haratia の関係について

ゲルマン社会における奴隸

メロヴィンガの社会について

マナー研究の問題点

ドイツ騎士団長の性格について

フランドルの農村工業について

マキアヴェリ私信について

Reformation ~ Wittenberg

神学について

——1520年頃を中心として——

ツヴェイングリの一断面

デューラーの幻想について 藤原 国男  
イギリスにおける救貧法成立の事情 植村 雅彦

メリランド成立と封建遺制 茨木 慶三  
フランス植民政策と産業革命 泉 倭雄

一九〇五年、ロシアの学生運動 西島 百厚

古典的労働貴族の概念 市川承八郎

唯物史観の前提としての人間 河村 盛一

エヌ・イ・カレーエフの歴史研究に 阿部 重雄  
関する一考察

マイネッケ史学の根柢に関する一考察 米田 治

理論と歴史——マックス・ウェーバー とカール・ランプレクト—— 西山 勤二

西洋史読書例会 十一月十日(土) 午後一時 史学科演習室

Georg von Below: Die Ursache der Reformation 井上 淑子

地理学関係

人文地理学会大会 十一月四日(日)

京大文学部

天理市の性格 桑原 公徳

転飼養蜂業者の移動と分布 大島 襄二

南米の焼畑農業についての一、二の考察 佐々木高明

麓集落に関する二、三の検討 押野 昭生  
近世城下町としての徳島 福井 好行

江戸時代における西洋地球説排撃と 仏教系世界図 海野 一隆

モンテスキュー「法の精神」に於ける印度 金子 廉

日本の年令別人口構成の形態 高木 秀樹

西南日本の人口の増加地域と減少地域 岸本 実

地震に伴う地殻の変動と高知浦戸湾の開拓 稲見 悦治

和泉中心部の条里地割 大越 勝秋

社会地理学の方法論 樽松 静江

江戸時代摂河綿作地帯における土地利用の一形態 浮田 典良

濃尾農村近代化の地域性 坪内 庄次

飯山盆地の農村家内工業 菊地 万雄

伝統工業の立地に関する考察 西村 睦男

八丈島の土地所有型と半農半漁性 大村 肇

大村 肇

大村 肇

大村 肇

大村 肇

長野県産高原野菜の輸送について

中川 浩一

考古学協会秋季総会及び大会  
十一月二・三日 同志社大学

丹那盆地の酪農

佐々木清治

青森県三戸郡大館村赤御堂貝塚の調査

序 説

水津 一朗

御蔵島ゾウ遺跡の調査

江坂 輝弥

生 産

谷岡 武雄

新潟県榎倉遺跡調査の概要

麻生 優

商業・交通

木地 節郎

隠岐島縄文遺跡の調査

小出 義治

文化・会社

岩田 慶治

山口県豊浦郡土井ヶ浜遺跡の調査

末永雅雄・山本 清

行 政

藤岡謙二郎

沼隈半島の考古学的調査

金関 恕

人文地理学会特別例会

十一月十七日(土)  
京大文学部

立教学院総合運動場内発見の土師器伴出

豊 元国

欧米視察談

帷子 二郎

箕落址調査

熊本県吉尾古墳群調査報告

酒詰仲男・石部正志

金谷 克己

地理学談話会大会

十一月三日(祝)  
京大文学部

紀伊明楽山古墳群調査報告

陶器千塚調査概報

萩 浩一

林野の共同体的所有と利用形態の

斎藤 晃吉

栃木県古墳と栃木県製陶窯址との関係に

就て

川島 守一

大阪府南河内郡国分町安福寺石棺の文様

宇佐 晋一

地理学的研究

阿部 正道

飛鳥寺第一次調査概報

浅野 清・杉山信三・坪井清足

日本原始農耕試論

清水 潤三

資金と地域に関する経済地理的法则

河地 貫一

日本における初期鉄製品について

岡崎 敬

中国における初期鉄器の問題

関野 雄

江戸時代「鎌倉道」交通の

歴史地理的研究

紀州の近世における地方行政区劃

変遷と村落の分合

近藤 忠

アメリカ古文明の形成理論

宮川 善造

考古学関係

王名郡倉址と推定せられる肥後立願寺の

遺構

田辺 哲夫

武蔵国分寺発掘調査概報

石田 茂作

福岡県若宮町竹原古墳の壁画

森 貞次郎

群馬県横穴式古墳の編年

尾崎喜佐雄

能登の石造塔婆

日野 一郎

研究 部 会

日本における無土器文化の地質・地形学

上からみた位置について

芹沢 長介

長野県古屋敷遺跡の無土器文化

鈴木 誠・小林国夫・藤沢宗平

西日本無土器文化研究の概要

鎌本義昌

米を出土した縄文文化の一遺跡

清水 潤三

日本原始農耕試論

酒詰 仲男

日本における初期鉄製品について

岡崎 敬

中国における初期鉄器の問題

関野 雄

考古学談話会 十一月十四日 楽友会館

十一月六日から集中講義として「日本先史

時代土器の研究」を講ぜられた東京大学山

内清男講師をかこんで教室員及び聴講者が

先史学の諸問題について話しあった。